

② 南四国縄文晚期磨研鉢の分類と編年

はじめに

西日本の縄文土器は、後期以降器種組成における精粗の分化が進み、晚期には精製の磨研鉢⁽¹⁾と粗製の深鉢という組合せが一般化した。うち磨研鉢は、西日本の広い範囲でおよそ同一形態のものが共通してみられることから広域編年の資料としての有用性が認められ(泉 1990)、また壺・甕・高坏を主要器種とする弥生土器に継承されないことから、縄文文化伝統の遺存度をはかる指標ともされた。筆者は旧稿(宮里 2016)で、刻目突帶文土器の出現前後で分断されがちだった縄文晚期の磨研鉢について通時的変遷を把握すべく研究に取り組んだ。その際、磨研鉢の終焉にいたる最後段階を十分に整理することができなかった。筆者は現在、「農耕文化の波及に際する伝統文化の保持についての考古学的研究」(JSPS 科学研究費補助金 20K01075)を進めており、縄文文化伝統の継続性を課題として、まず煮炊具である深鉢の変遷を詳しく検討した(宮里 2022)。ここで縄文晚期深鉢が弥生土器と共存しながら型式変化をつづけ弥生中期の地域甕につながることを明らかにするとともに、深鉢による年代的枠組みを整備した。この成果を踏まえつつ、縄文晚期磨研浅鉢の展開と終焉を改めて詳説し、磨研鉢の体系を明らかとすることが本稿の目的である。研究の背景は旧稿(宮里 2016)の通りであり、以下に分類と編年の詳細を述べる。

1 磨研鉢の分類

旧稿では、口縁形態・胴部形態に基づき縄文晚期磨研鉢の変化階梯を第1~5段階に区分した。本稿では旧稿の成果を土台にさらに4つの段階を加え、第1~9段階の区分により磨研鉢の通時的変遷を示す。

以下にまず部分的に理解を改めた第1~5段階の内容を再整理する。つづけて、第5段階以降に出現した、波状口縁方形浅鉢、内折口頸鉢、浅鉢変容壺、浅鉢系無頸壺、波状口縁鉢、多頭鉢を磨研鉢の細別器種として設定し、それぞれの内容を詳述する。

(1) 口縁・胴部形態による第1~5段階

南四国の縄文晚期磨研鉢は、晚期初頭から刻目突帶文出現期にかけての第1~5段階においては、喇叭形・胴張り形・鈎口ボウル形を主要3器種として展開した。第1~5段階における3器種の割合は、時期によって違いがあるが、総じて喇叭形が7割近くを占め、胴張り形が2割、鈎口ボウル形が1割となる(宮里 2016)。3器種はそれぞれ独自の器形的特徴と変化をみせるが、口縁の特徴を同じくしており、口縁形態が器種間に共通する時期差の基準となる。

旧稿(宮里 2016)と同様に、時期差の基準となる口縁形態をa~g類に分類する(第IV②-1図)。旧稿では板状の口縁に2条の凹線をめぐらすa類を基点とする展開を示したが、その後の資料観察によりe類の位置づけを再考したため、改めて変化階梯を説明する(第1~5図)。

a類の板状口縁を粘土紐1段の積み上げで作出了したのがb類であり、外面の線文は粘土紐接合に伴う凹帶に変わった(b1類)。外面の凹帶は文様化して沈線となり粘土紐積み上げによる肥厚も縮小する(b2類)。b2類はb1類の省略型であるが、粘土紐を斜め外方に積み上げたc類ではb1類の略化が内外面に微弱な凹帶を残す方向に進んだ。a類→b1類→b2類と進んだ変化は、さらにb2類の沈線・肥厚が失われる方向に進みd類へ至る。d類の口縁端部の上方への突出が、口唇内端の玉縁状の肥厚へと変化しf類となる。f類の肥厚が弱まり、片切彫りによる抉り段で痕跡的な玉縁を作出したのがe1

類である。e1類はf類が痕跡化したものであるが、e1類の抉抉り段はさざれない略化して沈線となる。e2類はe1類の外面に1条の線文が加えられたものであり、線文の起源は不明であるがe1類の派生型と理解しておく。g類はボウル形に通有の口縁形態として磨研鉢の当初から存在したが、f類からe1類にかけて口縁の造形が縮小・略化される状況下で、主要3器種に共通する口縁形態として定型化した。

口縁形態におけるa類→b1・b2類→d類→f類→e1類の変化階梯にもとづき、喇叭形・胴張り形・鈎口ボウル形の磨研鉢を第1~5段階に区分する(第IV②-5図)。丸胴中心であった胴部形態が面胴(反り胴をふくむ)に変化するのは第4段階であり、また胴部における多段化(抉り段による装飾)と肩部形成(有文の胴部上半)は第5段階の特徴である。

口縁形態がe1類中心となり、胴部に多段化・肩部形成が起こる第5段階を転換期として、磨研鉢の器種再編が始まる。新たに編成される器種は、波状口縁方形浅鉢、内折口頸鉢、浅鉢変容壺、浅鉢系無頸壺、波状口縁鉢、多頭口縁鉢である。これら器種の内容を詳説し、第5段階につづく第6~9段階を設定する。

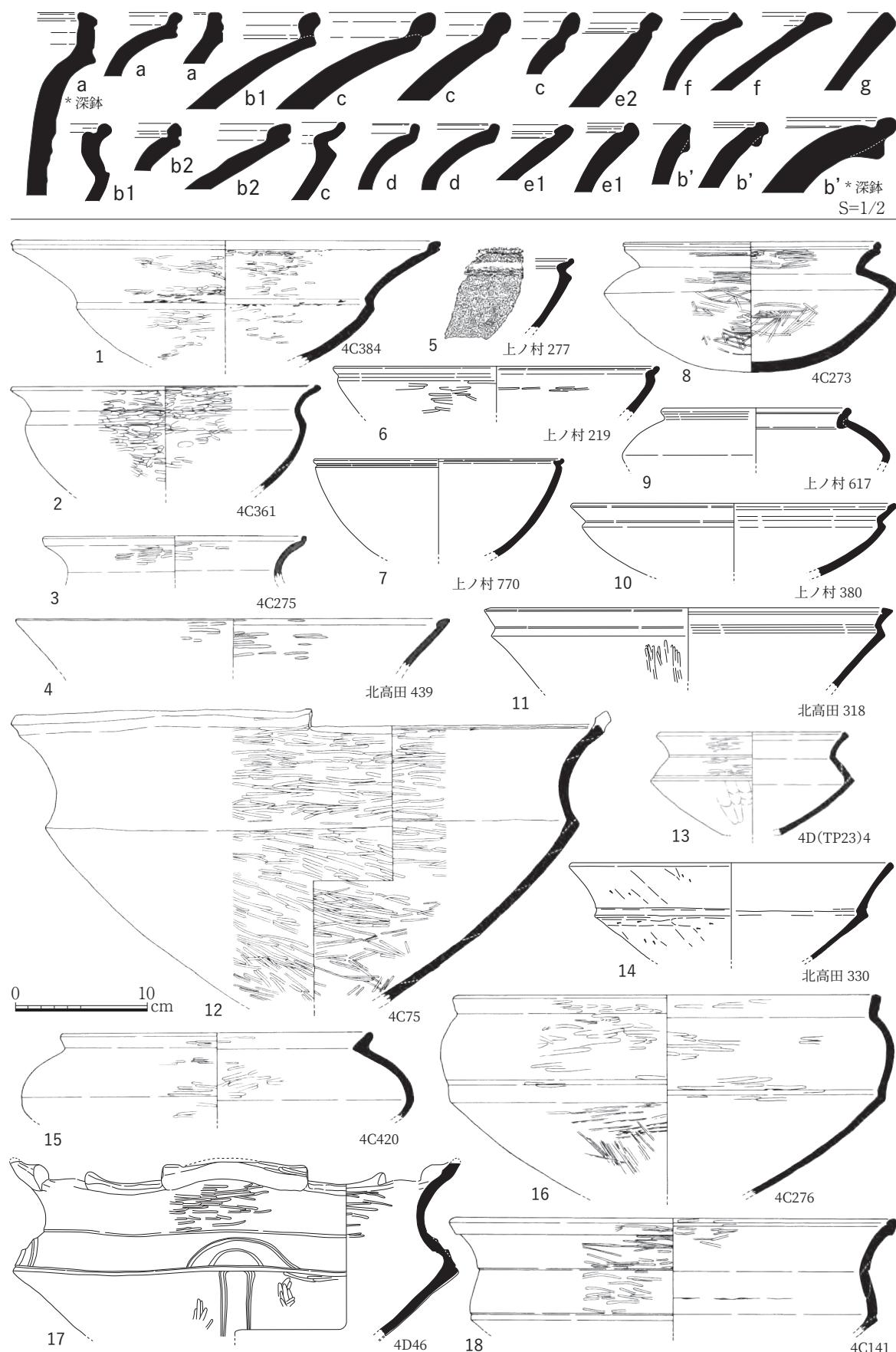
(2) 波状口縁方形浅鉢の分類

波状口縁方形浅鉢は、口縁が波状で上面観が方形を呈する磨研鉢である。記述の便宜のため「波方鉢」と表記する。喇叭形磨研鉢の系譜を引く器種であり、面胴から屈折して上方に立ちあがる口頸部が4頂の波状口縁となる。4頂の波状口縁であれば上面観はおよそ方形となるが、「方形」の印象を強めるのは胴屈折部の波形であるため、波方鉢は胴屈折部が口縁に応じて波状を呈するものとなる。波方鉢は縄文・弥生移行期にあって次第に減少・消滅すると捉えられ、出現期こそ編年の材料として注目されるが終焉までを視野に収めた型式学的検討は未だ十分でない。

波方鉢は、泉拓良(1990)が鍵形口頸部の微細な変化により波方鉢の出現過程と変化を詳説したことで、刻目突帯文土器出現期の様相を把握するための重要資料となった(坂口 1996)。泉は、中国・四国地方以東の凸帯文土器様式を第1・2a・2b様式に区分し、波方鉢については、鍵形口縁の変化にともない波方鉢が形成される段階(第1様式)、典型的な波方鉢の段階(第2a様式)、方形の形状が失われた段階(第2b様式)と3段階に区分した。泉が最後段階として図示した磨研鉢は内折鉢(後述)であり、波方鉢の組列外であるが、上面観を方形とする特徴の喪失が示唆された。また山崎純男は九州の第1~3様式に伴う波方鉢を図示し、説明を欠いているが器形における屈折の略化過程が示唆された(泉・山崎 1989)。森下英治(2000)による讃岐地域の検討では、突帯文期Ⅱb・c期に波方鉢(A1系譜)の口縁内面段が沈線化し胴部屈曲が略化するなどの変化が起こることや、弥生前期に波方鉢の製作が弥生土器の製法に転化することが指摘された。宮地聰一郎(2008)は、刻目凸帯文土器を5分期したうちのⅠb期・Ⅱa期・Ⅱb期古について該当する磨研鉢を図示し、変化の過程における口縁部の短小化に言及した。小南裕一(2012)は、精製浅鉢Gとした波方鉢を、口頸が長いGa、口頸部がやや短小化したGb、口頸部がさらに短小化し波状单位が増加したGcに分類し、さらにGcを屈曲が明瞭なGc①と屈曲が痕跡化したGc②に細分し、波方鉢の連続した変化を示した。

先行研究の成果を参考すると、さらなる型式学的検討の余地があるが、波方鉢には口頸部の違いにより区分される3種類があると分かる。南四国の波方鉢も同様の傾向があり、口頸部の違いを主とし胴部形態や細部の特徴を加味した3区分が可能である。波方鉢A型・B型・C型とし、以下に内容を示す。

波方鉢A型(第IV②-2図1・2)は、面胴から屈折して立ち上がる口頸部が上方に長く延びるものである。口縁と胴屈折部の湾曲は相対的に小さい。胴屈折部の湾曲をのぞけば喇叭形磨研鉢との類似度が高く、波方鉢が喇叭形磨研鉢からの派生型であることを窺わせる。類例は少なく居德遺跡の2点にとどまる。口縁形態はg類(第IV②-2図1)と抉り段のe1類(第IV②-2図2)であり、後者は口唇に刻みがあり、外面には口縁に沿った波状の刻目突帯が加わる。



第IV(2)-1図 磨研鉢(1~5段階)と口縁分類
(喇叭形:1~4・12・14・17・18、胴張り形:8・9・13・15・16、鉤口ボウル形:5~7・10・11)

波方鉢B型(第IV②-2図3・4)は、面胴から屈折して立ち上がる口頸部が外方に短く延びるものである。口縁と胴屈折部の湾曲は大きい。類例は9点で居徳遺跡に8点、上ノ村遺跡に1点がある。口縁部はe1類(第IV②-2図4)とg類が多く、f類(第IV②-2図3)も肥厚が弱くむしろ抉り段のe1類に近い。波頂の口唇部に刺突による一対の珠文(第IV②-2図3)をもつものが2点ある。

波方鉢C型(第IV②-2図5~7)は、胴が膨らみをもった丸胴に変わり、痕跡化した胴屈折部が段や凹帯となったものである。口頸部は僅かに外折するか(第IV②-2図5・7)、丸胴の屈曲に沿って上方に延びる(第IV②-2図6)。波状口縁鉢(後述)への連続を考えれば、上方に延びる後者が新相と考えられる。類例は24点で居徳遺跡に23点、上ノ村遺跡に1点がある。口縁部はe1類が主体で少量のg類が加わる。e1類は抉り段(第IV②-2図5)に加え、沈線(第IV②-2図6・7)が半数程度を占める。胴屈折部の内面に沈線がめぐるもの(第IV②-2図6・7)もあり、口縁・胴部ともに造形上の特徴が沈線に置き換わって文様化している。また波頂の口唇部に一対の珠文をもつもの(第IV②-2図5)が4点ある。

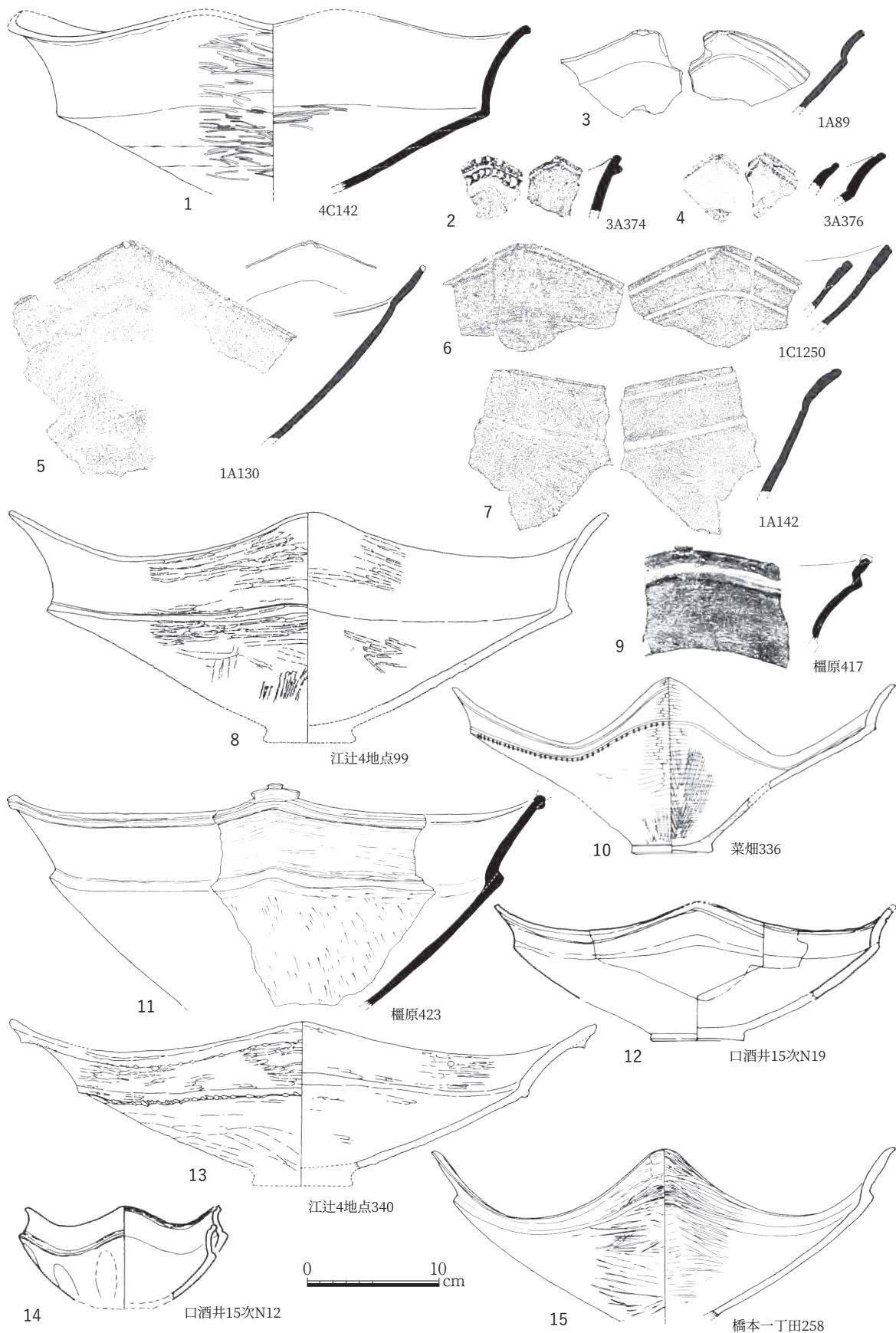
波方鉢の3型式は、形態的特徴が略化する方向で変化する。器形は、口頸部が面胴から屈折して長く上方に延びるA型から、口頸部が外方に短く延びるB型に変化し、丸胴化の進行とともに口頸部の屈折が痕跡化するC型に連なる。口縁部はA型からB型にかけては抉り段のe1類が中心となり、C型になるとe1類の抉り段は沈線に変わり、あわせて胴部内面の屈曲も文様化し沈線表現となる。

波方鉢は西日本の広い範囲で確認されるが、両極にあたる近畿と九州では口縁や胴部の形状に違いがある。九州は器形においては南四国と同様の分類が可能であり、A型(第IV②-2図8)、B型(第IV②-2図10・13)、C型(第IV②-2図15)に類する資料が確認できる。ただし口縁形態はg類相当が大部分であり、波方鉢C型の沈線文様も認められない。B型の胴屈折部に刻みを加えることも九州の特徴とみられる。一方の近畿は、泉(1990)が鬼塚遺跡、権原遺跡、口酒井遺跡の資料で示したように、鍵形口縁をもつ波方鉢からの連続的に変化する。九州や南四国との違いは胴部形態にあり、近畿の波方鉢は一貫して丸胴気味で深い傾向にある。口縁部はg類を主体とする。口頸部の形態にしたがってA型(第IV②-2図11)、B型(第IV②-2図12)、C型(第IV②-2図14)に類する資料を示すこともできるが、南四国とは特徴を異にする。南四国の波方鉢は大きくは九州の系統にあるが、口縁e1類の卓越に南四国の地域色があり、波方鉢C型においては南四国独自の地域型式となっている。香川県林・坊城遺跡(香川県埋蔵文化財調査センター編 1993)には波方鉢C型の類品(SR1流路A下層)があり、詳細は今後の検討課題であるが、刻目突帯文土器(服部型)と同様に備讃瀬戸地域と南四国の親縁性を示している。

(3) 内折口頸鉢の分類

内折口縁鉢は、逆く字形口頸部浅鉢(泉 1990)と呼ばれる、面胴から屈折する短い口頸部が内側につよく折れる器形の磨研鉢である。ひろく共有された名称であるが、本稿ではより簡素に内折口頸鉢と名付け、さらに記述の便宜のために「内折鉢」と表記する。南四国の内折鉢は居徳遺跡(第IV②-3図12)や庭ヶ渕遺跡、倉岡遺跡などに極少数があるのみで詳細な分析に堪えないが、西日本晩期磨研鉢の重要器種であるため内容を整理しておく。

内折鉢は刻目突帯文土器にともなう磨研鉢の代表的なもので、泉(1986・90)は、北部九州の山ノ寺式で磨研鉢の外反口縁部の縮小により出現した器種と評価し、近畿の口酒井式を設定する際にも基準資料とした。泉(1990)は内折鉢を2つの形態に区分し、A種を口縁外側が肥厚し、口縁下・口縁内面・胴屈折部に沈線を持つもの、B種を口頸部が長く沈線をもたないものとした。内折鉢の2分類はひろく共有され、岡田憲一(2011)は近畿の資料を対象に、内折鉢を凸帯文2期の基準資料として、2a期には口頸部が短く屈折して肩部と口縁部上端に沈線がめぐり、2b期には口縁部が大きく延びたものに変わると区分した。小南(2012)は瀬戸内の資料を対象に、浅鉢Fとした内折鉢を2分類し、Faは口縁端部が強く外反し沈線をもつもの、Fbは口縁が直立気味で沈線をもたないものとした。九州の内折鉢は、山崎純男(1980)が、底部を欠く場合に高坏との区別が困難と指摘したように、口頸部の立



第IV(2)-2図 波状口縁方形浅鉢

(鉤状口縁:3・9、波方鉢A:1・2・8・11、波方鉢B:3・4・10・12・13、波方鉢C:5~7・14・15)

ち上がりが内傾から上方へと変化し高坏に近づくが、瀬戸内や近畿のようには口縁が伸長しない。宮地(2007)が区分した、口頸部の端部のみを外反肥厚させるものと、口頸部全体を外反させるものの違いは内傾段階の内折鉢を細分したものである。

内折鉢の分類においては口頸部の長短と沈線の有無が基準とされてきたが、本稿では波方鉢や後続器種との関係を考慮し、口頸部立ち上がりの向きと胴部形態によりA型・B型の2型式に分類する。

内折鉢A型(第IV②-3図1~3・12)は、面胴から屈折する短い口頸部が内方に立ち上がるものである。宮地(2007)の第1段階(第IV②-3図1)・第2段階(第IV②-3図2)をふくみ細分の余地がある。

内折鉢B型(第IV②-3図4~6)は、丸胴から口頸部が上方に立ちあがるものである。丸胴化は瀬戸内・近畿に顕著であり、九州の資料は主に立ち上がりの方向により区分される。口頸部が著しく長いもの(第IV②-3図9)は変容壺(後述)に含めたが、内折鉢B型と変容壺の関係は深く、両者の境界は曖昧である。波状口縁の採用(第IV②-3図6)は後続する波口鉢との併行関係で問題となる。既往の研究で重視された沈線の省略は口縁部の現象であり、内折鉢B型の胴屈折部には沈線あるいは段が認められる。

宮地(2007)は内折鉢の起源を、口縁内面の沈線の欠如や器種組成の違いから、九州に求めている。口縁内沈線の有無に差異をもちつつ、器形の類似度が高い磨研鉢が九州を基点に近畿まで一斉に拡散し共有された状況となる。すると南四国における内折鉢の欠如が大きな意味をもち、変容壺と無頸壺(後述)を併せた事象の理解が必要となる。

(4) 浅鉢変容壺の分類

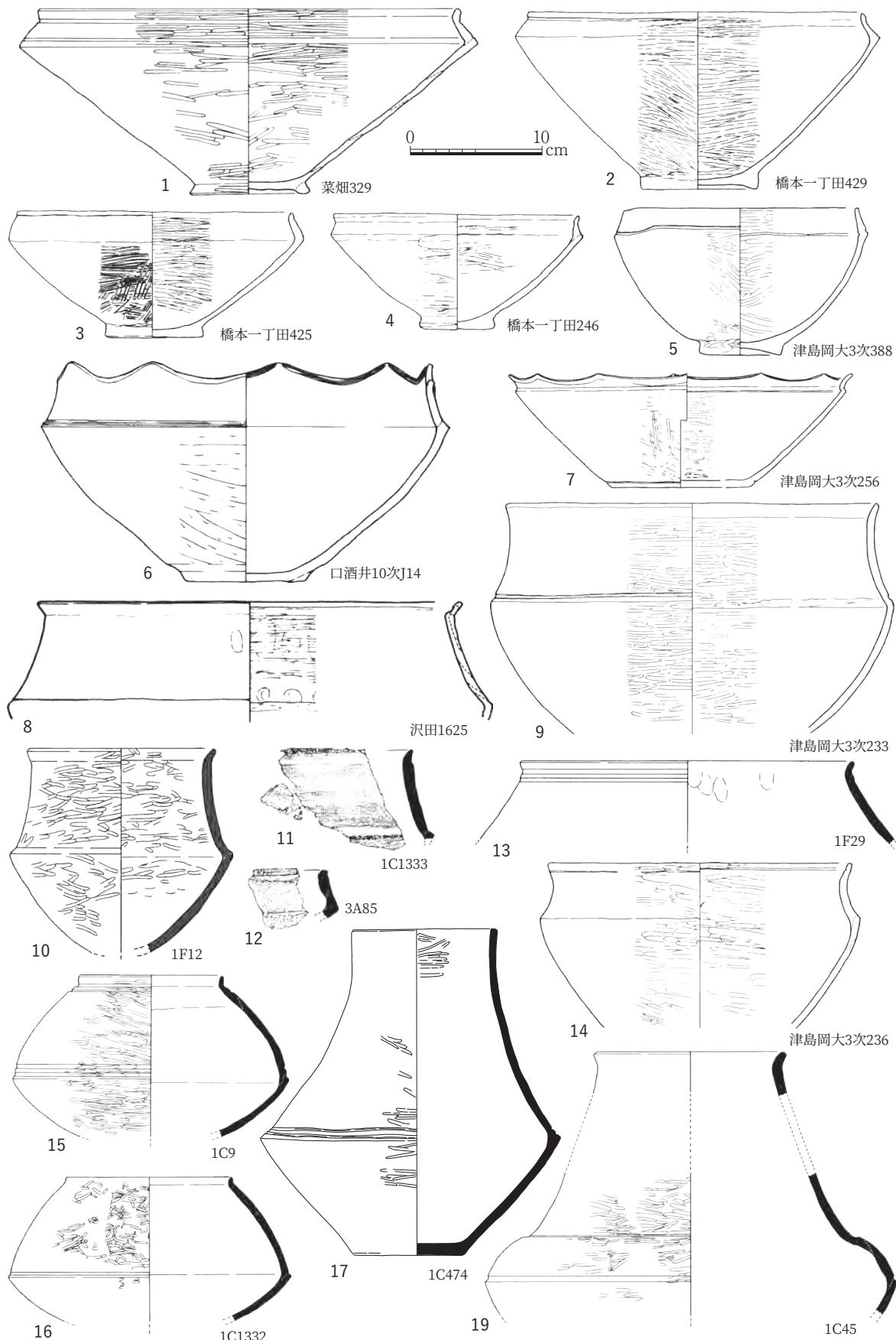
浅鉢変容壺は、藤尾慎一郎(1991)が縄文系壺形土器として問題化した「浅鉢変容型」の壺である。内折鉢の口頸部が伸び壺の頸部に転化したことで、内容物がこぼれにくい締まった頸部と内部の容量が確保される丸い胴部をもつ壺に変容した器種と評価された。変容壺は、備讃瀬戸北岸域における沢田式(平井 1988)では浅鉢型D類とされ、内折鉢に短い外反口縁が加わった器形を特徴とし、口縁内面の段(第IV②-3図8)の有無が細分の基準とされた。藤尾(1991)は、変容壺の口縁内面の段を瀬戸内の土器製作伝統と評価し、遠賀川式の壺へ継承される要素と考えた。山本悦世(1992)が示した津島岡大資料では変容壺(I Aa類)と内折鉢B型(III Ba類)に相当する資料が同時期となり、内折鉢がA型からB型に変化する過程で壺の影響を受けた変容壺が派生したと理解することができる。

南四国の変容壺(第IV②-3図10・11・13・17)は居徳遺跡を中心に上ノ村遺跡、栄工田遺跡などで36点が確認される。短く外反する口縁はg類にあたる形態であり、外面屈折部に1~2条の凹線(第IV②-3図13)をめぐらすものが少数ある。口縁がe1類である栄工田遺跡資料には口縁内面に沈線がめぐるが、いずれの資料にも瀬戸内の特徴とされた内面の段は認められる違いがある。頸部付け根については段(第IV②-3図10・11)をなすものが多く、一部は沈線をめぐらす。頸が長く伸びて壺との類似度が高まったもの(第IV②-3図17)があり、変容壺の壺化が進んだ新相にあたると考えられる。

(5) 浅鉢系無頸壺の分類

浅鉢系無頸壺(第IV②-3図15・16)は、胴張り形磨研鉢の後継となる南四国独自の器種として筆者が設定したものであるが(宮里 2018)⁽²⁾、器種の成立には変容壺と同じ背景がある。記述の便宜のため「無頸壺」と表記する。居徳遺跡からのみ出土し、32点がある。丸胴から屈折し内傾して立ち上がる胴部上半は張りをもち、窄まった先には上方に短く屈折する口縁部がつく。張りのある胴部上半は、変曲部凹線の類似により壺の肩部(第IV②-3図19)が移植され形成されたと考えられる。磨研鉢の系譜上にあって変容壺と同様のプロセスにより生成した器種であり、胴張り形との直接的な関係を示す資料が乏しいため、変容壺の地域的変異と考えるべきかもしれない。

口縁下端と胴屈折部の造形・文様に違いがあり、口縁部には1~2条の凹線を持つものと持たないもの、胴屈折部には1~2条の凹線を持つものと段をなすものの違いがある。層位で時期差が確認で



第IV②-3図 内折鉢・変容壺・浅鉢系無頸壺ほか関連資料
(内折鉢A:1~3・12、内折鉢B:4~6、変容壺:8~11・13・14・17、浅鉢系無頸壺:15・16)

きる居徳遺跡1C区では、下層(IV D層)に凹線があり(第IV②-3図15)、上層(IV B層)は段をなすため(第IV②-3図16)、前者を無頸壺の古相、後者を新相と区分できる。

(6) 波状口縁鉢の特徴

波状口縁鉢は、南四国では全形が分かる資料に乏しいが、口酒井遺跡(第IV②-4図11)や三谷遺跡(第IV②-4図12)、居徳遺跡の類品(第IV②-4図10)を参考にすると、器形は平底のボウル形で口縁が主に4頂の波形となり、口縁内面に波状の湾曲に沿った複数条の重弧線が端部を連接させながらめぐるものとなる。記述の便宜のため「波口鉢」と表記する。波口鉢の胎土はチャートの粗粒を多く含み、器面調整はミガキであるが仕上げが粗く、全体に粗製である。泉(1990)が「口縁内面に2条の沈線をもつもの」として自身の刻目突帯文土器II b期新に位置づけ、岡田(2011)が「皿形で口縁部内面に2条ないし1条の沈線をほどこす」ものとして自身の凸帯文3b期に位置づけるなど、各地で存在が認識されてきた磨研鉢である。南四国の類例は29点で、八田神母谷遺跡に1点ある他はいずれも居徳遺跡の出土品である。

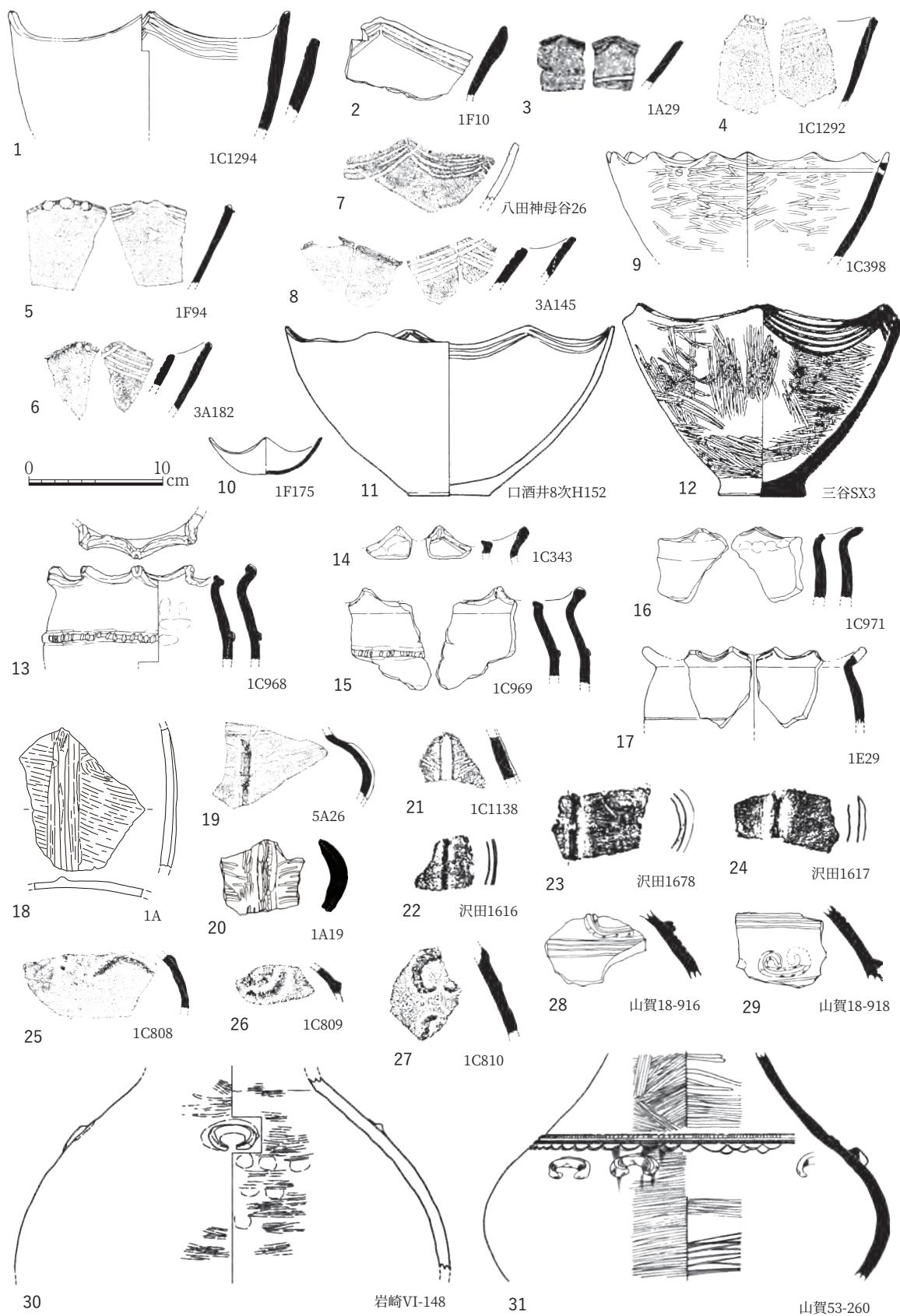
波口鉢は幾つかの特徴により波方鉢から変化したものと考えられる。器形は三谷遺跡の資料(第IV②-4図12)に近い、腰の張りが弱いボウル形に復元できるが、口縁には僅かな外反(第IV②-4図4)や外側の肥厚(第IV②-4図2)があり、波方鉢C型(第IV②-2図5~7)の痕跡と認められる。また、口唇波頂部には一对の珠文(第IV②-4図6)や刺突文(第IV②-4図1)、ユビオサエによる1~3個の削込み(第IV②-4図5・7)があり、波方鉢の口唇珠文が継承され、粗略化が進んだものと考えられる。すると口縁内面の重弧文は、波方鉢の口縁および胴部内面の沈線が、胴屈折部の消滅にともない、口縁内面の線文として編成されたものと理解できる。胴部内面沈線が名残として残るものもあるが(第IV②-4図3)直線化している。南四国の波口鉢の口縁内面重弧文は2条から4条までがあるが、波方鉢C型の口縁・胴部沈線に相当する2条が当初のもので、多条化が進んだと考えられる。南四国の波口鉢は4頂であるが、三谷遺跡の波口鉢は6頂に復元され、内面重弧文も5条である。八田神母谷遺跡の資料(第IV②-4図7)は6頂の可能性があり内面重弧文も3条であるから、波状口縁の多頭化と内面重弧文の多条化を波口鉢の変化の方向と考えることができる。備讃瀬戸地域や近畿では鈎口ボウル形(第IV②-3図7)や内折鉢B型(第IV②-3図6)など他器種でも多頭化現象が認められる。鈎口ボウル形の例は12頂で口縁はe1類相当で、内折鉢B型の例は9頂で口縁内面に波口鉢と同様の2条の重弧線がめぐる。波状口縁の内折鉢B型(第IV②-3図6)は波口鉢の影響を受けたものと考えられ内折鉢B型の下限を考慮する資料となる。

(7) 多頭口縁鉢の特徴

多頭口縁鉢(第IV②-4図13~17)は、全形が窺える資料を欠くが、樽形の器形が想定され、強く屈折し外反する口縁部は小突起が連なる波状を呈し、残りの良い資料(第IV②-4図13)を参考にすると波頭は10頂以上となる。記述の便宜のため「多頭鉢」と表記する。多頭鉢の口縁端部は内外に肥厚し、とくに内側の肥厚がつよい。幅のある口唇部には浅い沈線が加えられる。波頂部口唇の刺突と口縁内面をめぐる2条の重弧文(第IV②-4図16・17)は波口鉢と関連するもので、多頭鉢が波口鉢の後継であることを示す。一方で胴部にめぐる突帯(第IV②-4図13・15)は遠賀川式甕と同様の造形である。チャート粒を含む胎土、明るい発色の焼成、器面のハケメ調整は弥生土器の製法であり、土器の製作環境に大きな変化があったことを示す。出土事例は居徳遺跡に限られ10点がある。

(8) その他

その他の関連資料として、縦隆帯とC字突帯を取り上げる。いずれも壺形土器の胴部装飾と考えられる。縦隆帯(第IV②-4図18~21)は、丸く張った胴部に加えられた縦方向の隆帯である。居徳遺跡に4点



がある⁽³⁾。隆帯は幅1cm程度、高さ5mm程度で、断面には隅丸台形(第IV②-4図18・19・21)とアーチ形(第IV②-4図20)がある。丹彩の痕跡も認められる(第IV②-4図18・21)。器面の湾曲が弱い器形(第IV②-4図18・21)や縦隆帯が太いもの(第IV②-4図20)など形態差がある。黒色磨研(第IV②-4図20)もあるが、地の色調はにぶい褐色で、長石・石英・雲母を含む胎土は在地のものと異なる。類例は百間川沢田遺跡(第IV②-4図22~24)にあり、備讃瀬戸地域からの搬入品と考えられる。文様をもつもの(第IV②-4図21)はやや異質で、隆帯が低く、隆帯に沿うミガキは範囲が狭く粗雑で、器面には略化した木葉文とみられる斜方向の集線が粗く施文される。胎土は弥生土器と同類であり、在地化の一様態と考えられる。

C字突帯(第IV②-4図25~27)は、壺の肩部に貼付されたC字形の浮文である。居徳遺跡に3点がある。複数のC字突帯が一定間隔で肩部に配置されたと考えられるが、2つが向かい合うもの(第IV②-4図25)もある。いずれも弥生土器の胎土であり、つくりがやや粗雑である。大阪府山賀遺跡や愛媛県岩崎遺跡に類例がある。いずれも遠賀川式の壺に加えられた装飾である。山賀遺跡の資料(第IV②-4図28・29)には4条の集線文があり、岩崎遺跡の資料(第IV②-4図30)は頸部の締まりが強いなど、弥生前期のうちでも新しい段階にあたる。

3 磨研鉢各器種の組列と関係

旧稿(宮里 2016)で第1~5段階に区分した磨研鉢主要3器種(喇叭形・胴張り形・鉤口ボウル形)の変遷を口縁類型の再検討により改めて提示し、さらに第5段階以降の変遷を体系化するため、波方鉢、内折鉢、変容壺、無頸壺、波口鉢、多頭鉢の各器種を設定し内容を詳説した。以下では、まず第1~5段階について深鉢編年との併行関係を整理し、つづく段階として設定する第6~9段階を構成する各器種相互の関係を検討する。

(1) 磨研鉢第1~5段階と深鉢の併行関係

縄文晩期の磨研鉢と深鉢(宮里 2022)は時期的関係を示す出土事例が乏しく、形態の類似や変化階梯の比較、僅かな共伴事例に拠って併行関係を見定めなければならない。

磨研鉢口縁のa類からb類への変化は、深鉢型式における上ノ村U型から上ノ村T型への変化、すなわち2条線をもつ板状口縁から素凸帯口縁への変化に対応する。よって磨研鉢第1段階(a類)と上ノ村U型、第2段階(b類)と上ノ村T型に接点を見出すことができる。

倉岡型深鉢のうち、新相の屈曲タイプが居徳遺跡4C区SK1で、口縁e1類の喇叭形磨研鉢、口縁g類の胴張り形磨研鉢と共に伴した。喇叭形磨研鉢(第IV②-1図12)の口縁e1類はf類からの移行形態であり、また張りのある面胴がミガキ仕上げであるなど、第4段階と第5段階の中間的な様相を示す。よって倉岡型の多くが口縁f類を中心とする第4段階と併行する蓋然性が高く、同様に口縁e1類および多段化・肩部形成を特徴とする第5段階と倉岡型に後続する刻凸短頸型深鉢に変更関係を認めることができる。すると、上ノ村T型と倉岡型の間に位置する先倉岡型と、口縁b類とf類の間に位置するd類の併行関係を想定することができる。

明確な層位・共伴の事例が不足しているが、磨研鉢第1~5段階と深鉢型式は第IV②-5図のように対応関係を整理することができる。

(2) 波方鉢から波口鉢へ

波方鉢A型は、第4段階で面胴化した喇叭形磨研鉢が、肩部形成・多段化・有文化(第IV②-1図17・18)など多様化するなかで派生したもので、喇叭形の胴屈折部を波状口縁にあわせて湾曲させることで成立した新器種である。口縁形態がe1類・g類であるため第5段階に位置づけられる。第5段階は

備讃瀬戸北岸域の前池式に併行する刻凸短頸型深鉢(宮里 2022)に併行し、波方鉢が刻目突帯文土器と共に登場したと分かる。登場期の波方鉢は僅少で全体に占める割合はごく僅かであったがB型・C型と変化するにつれ数量が増加することが特徴的で、時期とともに磨研鉢の数量が減じていく西日本全体とは傾向が異なる。

波方鉢B型に相当する近畿や九州の磨研鉢は、口酒井遺跡や菜畠遺跡で内折鉢A型と併存する。広域編年の成果によれば、口酒井式・津島岡大式・夜臼IIa式(宮地の刻目突帯文IIa期)にあたる。つづく波方鉢C型は、後続型式・時期である船橋式・沢田式・夜臼IIb式に比定される。沢田式に併行する南四国の深鉢は刻凸喇叭型であるから、波方鉢C型は刻凸喇叭型と併行し、先行する波方鉢B型は刻凸短頸型と刻凸喇叭型の移行期へと位置づけられる。

(3) 内折鉢から変容壺・無頸壺へ

内折鉢は、刻目突帯文期を代表する磨研鉢で九州から近畿にいたる広い地域に共通してみられる器種であるが、南四国には極端に少ない。内折鉢はA型の特徴である口頸部の屈折と面胴が鈍化して、ボウル形に近いB型へと変化するが、この変化の過程で備讃瀬戸地域では壺の影響が加わった変容壺が生成した。南四国では内折鉢を受容しないが変容壺の受入れは積極的で、さらには変容壺と類似した造形の無頸壺が生み出された。

内折鉢A型は口酒井式、津島岡大式、夜臼IIa式を特徴づける器種であり、つづく内折鉢B型は後続型式である船橋式、沢田式、夜臼IIb式の構成要素である。変容壺は沢田式にともなう器種であり、内折鉢がA型からB型へ変化する過程で派生し成立したと考えることができる。

無頸壺は、在地における胴張り形磨研鉢の系譜が想定され、変容壺と同様の背景において、壺形土器の肩部を移植することで成立した。変曲点に凹線をもつ古相(第IV②-3図15)と凹線を欠く新相(第IV②-3図16)に分かれる。居徳遺跡1C区層序によれば、無頸壺古相は下層のIVD層、新相は上層のIVB層に対応する。同層から出土する深鉢型式と対照すると、無頸壺古相は刻凸喇叭型、無頸壺新相は刻凸長頸型と併存する。変容壺の新相(第IV②-3図17)もIVB層出土であり、無頸壺と変容壺が沢田式期に出現し、型式変化しながらつづく時期まで遺存したと分かる。

また内折鉢B型に波口鉢の特徴(第IV②-3図6)がみられることから、波方鉢C型が波口鉢へ変化する過程で内折鉢B型との間にも影響関係があったと分かり、内折鉢B型の遺存を示唆するが南四国の型式組列とは関わりが薄い。

(5) 波口鉢から多頭鉢へ

波口鉢は、口唇珠文の共通性などにより波方鉢が型式変化して成立したものと分かる。よって波方鉢A型・B型・C型・波口鉢は連続した型式組列をなし、時期差の基準となる。波方鉢C型が沢田式併行であるため波口鉢は後続の服部型と接点をもつと想定されるが、居徳遺跡1C区の層序によれば、波口鉢は上層のIVB層に集中するため刻凸長頸型および服部型との併行関係を認めることができる。三谷遺跡の波口鉢(第IV②-4図12)は刻凸長頸型に相当する下位突帯の深鉢が出土するSX3に集中しており、やはり相対的に新しい時期の器種と分かる。

多頭鉢は、波頂部の珠文や口縁内面の重弧文により波口鉢の延長線上に生成したと分かるが、胎土や焼成、ハケメ調整など遠賀川式の製法によって製作されており、製作環境の大きな変化を示す。多頭鉢の造形や器面調整は甕形土器に通じるが、胴部の刻目突帯(第IV②-4図13・15)や1条の沈線(第IV②-4図17)は西見当1式に類する特徴である。深鉢の型式組列でいえば居徳型の古相と接点をもつであろう。

4 磨研鉢の9つの段階

口縁形態のa類からe1類にいたる変化階梯および波方鉢から波口鉢をへて多頭鉢にいたる型式組列から、磨研鉢に第1～9段階を設定することができる(第IV②-5図)。各段階は一定の時間幅をもって推移すると考えられるため「時期」と読み替えるてもよいが、時期の指定は遺跡における層位・共伴の事例をもってさらに検討したい。

第1段階

第1段階は、磨研鉢の口縁形態がa類の段階である。未だ類例が少なく、また先行型式が不在であるため不明な点が多い。全形は窺えないが、喇叭形およびボウル形と認定できる資料がある。深鉢は口縁形態の類似により上ノ村U型が対応する。磨研鉢および深鉢の資料は上ノ村遺跡に集中し、鴨部遺跡や姫野々上町遺跡に少数がある⁽⁴⁾。

第2段階

第2段階は、磨研鉢の口縁形態がb1類・b2類・c類の段階である。b1類を基点とするb2類・c類への変化があり一定の時間幅があると考えられる。喇叭形が多数を占め、鈎口ボウル形は少量で胴張り形は僅少である。変化階梯の対照によれば第2段階には深鉢の上ノ村T型が対応する。第2段階の磨研鉢は上ノ村遺跡、居徳遺跡、栄工田遺跡、鴨部遺跡、新改小山田遺跡、姫野々上町遺跡などで前段階より遺跡数が増し分布範囲も拡がる。

第3段階

第3段階は、磨研鉢の口縁形態がd類の段階である。喇叭形が中心で鈎口ボウル形が僅かにある。変化階梯の対照によれば深鉢は先倉岡型が対応する。比較的時期が限定される北高田遺跡は深鉢が倉岡型、磨研鉢が口縁f類・e1類・g類の各器種から構成されるため、変化階梯においてこれらに先行する磨研鉢の口縁d類と先倉岡型を、第2段階から変化が進んだ、第4段階に先行する1つの段階として析出することができる。良好な資料を待っての検証が必要である。分布の傾向は第2段階と同様である。

第4段階

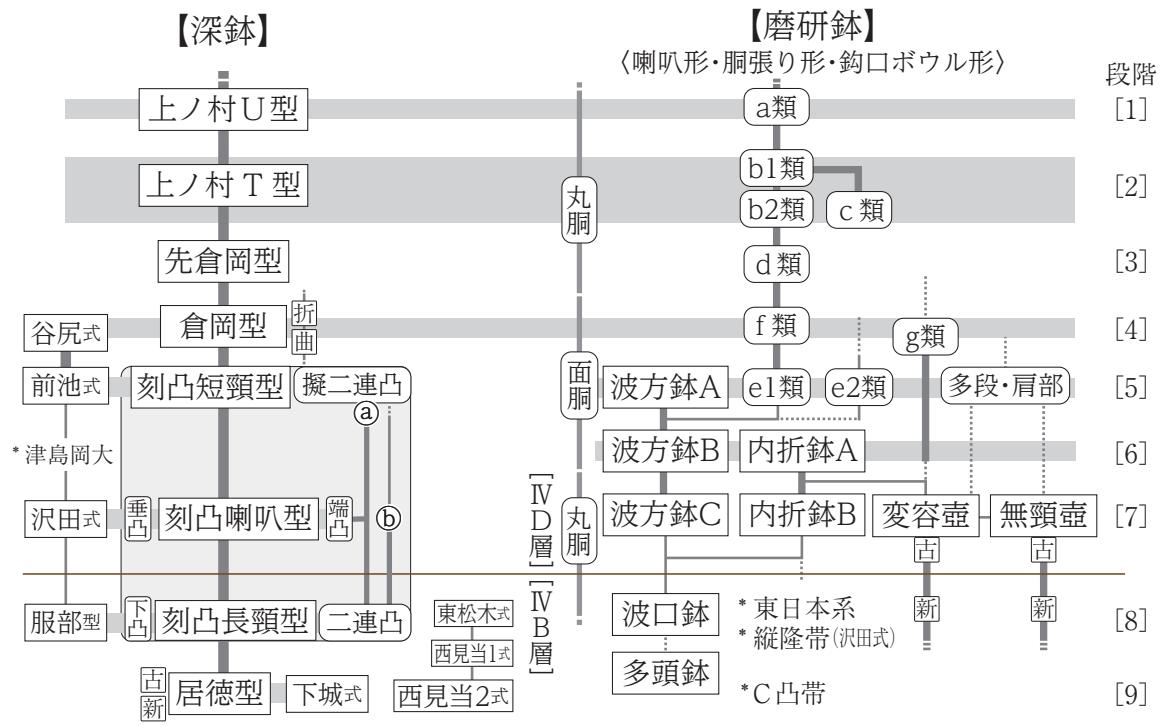
第4段階は、磨研鉢の口縁形態がf類の段階である。g類も一定の割合を占めるが、g類単独で時期を絞るのは困難である。f類の口縁は磨研鉢にもっとも多いもので、出土遺跡も居徳遺跡、上ノ村遺跡、北高田遺跡、栄工田遺跡、新改小山田遺跡、林田シタノチ遺跡、美良布遺跡と増加が著しくまた範囲もひろい。磨研鉢は依然として喇叭形が中心であるが、胴張り形の割合が著しく高まり、鈎口ボウル形をしのぐ磨研鉢第2の器種となる。また磨研鉢は胴部の面胴化が顕著となり、数字では示しにくいが大型の個体も目立つようになる。器種組成・形態・サイズが大きく変化する段階であり、磨研鉢の変質が示唆される。

第5段階

第5段階は、口縁形態がe類の段階である。g類も一定割合を占める。器種組成・面胴形態・大型品などの特徴に加え、出土量や遺跡の分布も第4段階を継承する。第5段階の新しい特徴は、喇叭形・胴張り形における多段化と肩部形成であり、また数は少ないが波方鉢A型という新器種が登場する。第5段階は刻目突帯文深鉢の出現期であり、深鉢型式は刻凸短頸型が対応する。

第6段階

第6段階は、波方鉢B型の段階である。喇叭形や胴張り形、鈎口ボウル形が第6段階まで遺存するかは不詳で、遺存を示唆する型式変化も現状では認められない。刻目突帯文土器期を代表する内折鉢A



第IV②-5図 型式組列

型が併存する段階であるが、南四国では僅少である。深鉢は刻凸短頸型から刻凸喇叭型への移行段階であり、該当する型式を設定できていない。第6段階の遺跡は居徳遺跡、上ノ村遺跡があるので、第4・5段階に比べて急激に数が落ち込み、遺物の出土量も少ない。

第7段階

第7段階は、波方鉢C型、変容壺古相、無頸壺古相の段階である。出土遺跡は居徳遺跡、上ノ村遺跡、栄工田遺跡などに限られるが、出土量の増加が顕著である。磨研鉢は胴部がふたたび丸胴傾向となり、各器種とも深みのある器形となるが、壺が担う貯蔵の機能を在来の器種で補うべく変容壺や無頸壺を生み出したことが、磨研鉢の造形を変化させたといえる。深鉢型式は刻凸喇叭型が対応する。刻凸喇叭型深鉢は松ノ木遺跡、上ノ村遺跡、新改小山田遺跡、八田神母谷遺跡、八田奈呂遺跡などから出土するが、出土資料の95%は居徳遺跡のものであり、磨研鉢とともに居徳遺跡への集中傾向が顕著である。

第8段階

第8段階は、波口鉢と変容壺新相、無頸壺新相の段階である。縦隆帯土器も、やや根拠は弱いが居徳遺跡1A区包含層におけるゆるやかな共伴関係により第8段階に位置づけられる。居徳遺跡1C区IVB層の時間幅のうちの古段階にあたる。深鉢型式は刻凸長頸型が対応する。磨研鉢・深鉢とも、第7段階につづき居徳遺跡への集中傾向が顕著である。居徳遺跡から出土した東松木式最古形態(3A区294)や、1A区・1C区IVB層から出土した東日本系土器は第8段階に伴うと考えられる。

第9段階

第9段階は、多頭鉢の段階である。居徳遺跡1C区IVB層の時間幅のうちの新段階にあたる。多頭鉢は弥生土器の体系に取り込まれており、縄文晩期伝統の磨研鉢はここに至って消滅する。壺形土器のC字突帯は第9段階に伴うであろう。深鉢は居徳型が対応し、弥生土器では西見当1~2式との併行関係が見込まれる。多頭鉢の出土は居徳遺跡に限定され、磨研鉢の製作伝統の痕跡が居徳遺跡にのみ遺存した状況である。

結び—居徳遺跡の時代—

以上、縄文晩期の初頭から弥生前期の後半にいたる磨研鉢の体系と段階を整理した。うち刻目突帶文土器出現後にあたる第5～9段階の磨研鉢は、既往の研究においては、縄文伝統が衰退・消滅する時期として遠賀川式の出現にくらべて軽視されてきた。しかし、南四国では、深鉢とあわせてみると一層顕著であるが、縄文伝統の土器がかえって多様に展開した。とくに第8段階を前後して、居徳遺跡は拠点化の様相を強め、精製土器や土偶など東日本系文物が集中して出土するなど、存在感を増している。本稿および深鉢の研究成果(宮里 2022)により、縄文晩期から弥生前期にかけての年代尺が整備され、遺跡の動態および社会変動を検討するための準備が整った。今後、居徳遺跡をめぐる謎として残る、東日本系文物の系統と出現過程を明らかにし、農耕文化の波及に際する伝統文化の保持についての考古学的研究を一層深めたい。

本稿をなすにあたり下記の方々・機関からご助言・ご助力を賜りました。記して感謝申し上げます(敬称略、順不同)。

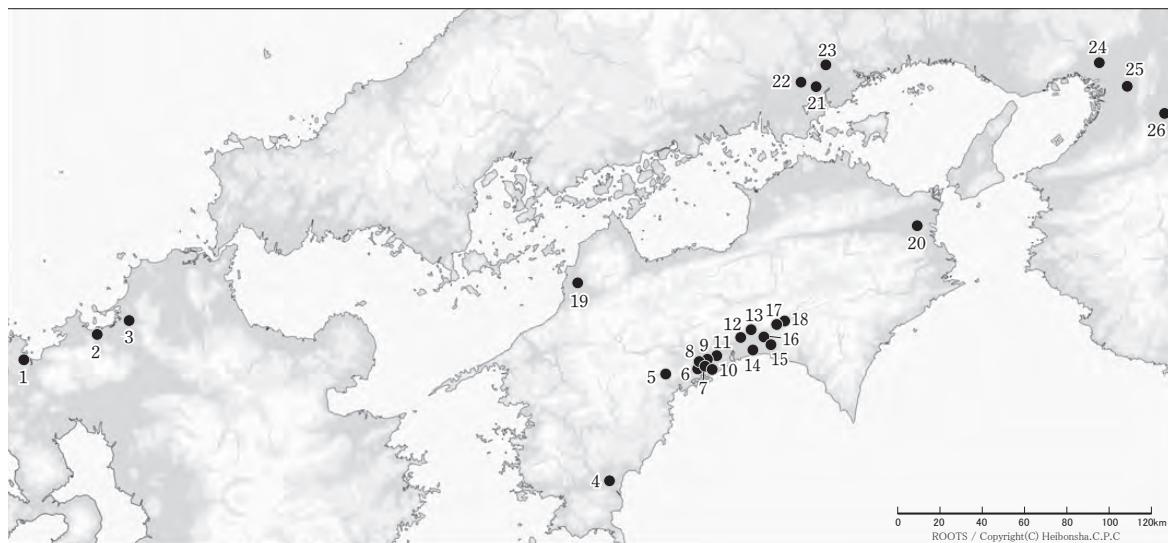
柴田昌児、谷若倫郎、出原恵三、中村豊、山崎孝盛

岡山県古代吉備文化財センター、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、香美市教育委員会、

高知県立埋蔵文化財センター、香南市文化財センター

註

- (1)いわゆる「黒色磨研土器」を、前稿(宮里 2016)では黒色に限られないことから「磨研浅鉢」としたが、出現から消滅にいたる全過程を概観すると、浅鉢に限定されない広い意味での「鉢」として役割を担い続けたことが分かる。よって本稿では晩期に定型化した「磨研鉢」の系統として研究対象を捉えることにした。
- (2)あわせて設定した「浅鉢系広口壺」については、その後、5段階において活性化した多段化をともなう肩部形成によって生じた器種と評価するにいたり、壺の影響が想定できなくなった。喇叭形磨研鉢の最後段階にあらわれるが、分類単位として独立させるべきかは今後の資料増加を待ち再考したい。



第IV②-6図 遺跡の位置

- (1. 菜畑、2. 橋本一丁田、3. 江辻、4. 中村貝塚、5. 姫野々上町、6. 北高田、7. 倉岡、8. 居徳、9. 八田神母谷・奈呂、10. 上ノ村、11. 鴨部、12. 栄工田、13. 新改小山田、14. 田村、15. 庭ヶ瀬、16. 林田シタノヂ、17. 美良布、18. 仁井田、19. 岩崎、20. 三谷、21. 百間川沢田、22. 津島岡大、23. 南方前池、24. 口酒井、25. 山賀、26. 檻原)

(3) 第IV②-4図18は居徳遺跡1A区出土の未報告資料である。長さ10・5cm、厚さ5mmほどの破片で他の例にくらべ胴の湾曲が弱い。中央の縦隆帯は断面が隅丸台形で、幅1cm、高さ5mmである。隆帯は上端で低まって収束する。上端部分には丹彩の痕跡が残る。器面調整はやや右に下がる横ミガキで、隆帯の両側8mm幅は、隆帯の接合に付随する縦ミガキが横ミガキを切る。隆帯の上部右脇は斜めの指ナデにより若干くぼむ。内面はナデ調整である。胎土は長石・石英・金雲母・黒雲母を一定量含み、搬入品と考えられる。表面の色調はにぶい褐色となる。高知県立埋蔵文化財センターの許可を得て実測・掲載した。

(4) 磨研鉢第1～5段階の組成や出土数は旧稿(宮里2016)による。

文献

- 泉拓良、1989、「西日本磨研土器様式」『縄文土器大観4 後期 晩期 続縄文』、小学館、311～314頁
 泉拓良、1990、「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報』第8集、奈良大学文学部文化財学科、55～79頁
 泉拓良・山崎純男、1989、「凸帯文系土器様式」『縄文土器大観4 後期 晩期 続縄文』、小学館、347～352頁
 岡田憲一、2011、「近畿地方縄文晩期土器編年と奈良県下基準資料」『重要文化財 檜原遺跡出土品の研究』檜原考古学研究所研究成果第11冊、奈良県立檜原考古学研究所、310～335頁
 小南裕一、2012、「環瀬戸内における縄文・弥生移行期の土器研究」『山口大学考古学論集』、中村友博先生退任記念事業会、45～76頁
 平井勝、1988、「岡山における縄文晩期突帯文土器の様相」『古代吉備』第10集、古代吉備研究会、9～34頁
 藤尾慎一郎、1991、「水稻農耕と突帯文土器」『日本における初期弥生文化の成立』、横山浩1先生退官記念事業会、187～270頁
 水ノ江和同、1997、「北部九州の縄紋後・晩期土器—三万田式から刻目突帯文土器の直前まで—」『縄文時代』第8号、縄文時代文化研究会、73～110頁
 宮里修、2016、「南四国の縄文晩期磨研浅鉢について」『海南史学』第54号、高知海南史学会、1～20頁
 宮里修、2018、「晩期東日本系土器の四国・瀬戸内への波及」『中四国地方の外来系土器 発表資料集・集成資料集』、中四国縄文研究会島根大会実行委員会、33～52頁
 宮里修、2022、「南四国縄文晩期深鉢の型式分類と組列」『高知考古学研究』第6号、高知考古学研究会、1～26頁
 宮地聰一郎、2004、「刻目突帯文土器圏の成立(上・下)」『考古学雑誌』第88巻第1・2号、日本考古学会、1～32・38～52頁
 宮地聰一郎、2007、「逆「く」字形浅鉢の成立と展開」『第8回関西縄文文化研究会 関西の突帯文土器 発表要旨集』、関西縄文文化研究会、127～134頁
 宮地聰一郎、2008、「凸帯文系土器(九州地方)」『総覧縄文土器』、アムプロモーション、806～813頁
 山崎純男、1980、「弥生文化成立期における土器の編年的研究—板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野の場合—」『古文化論攷』、鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会、117～192頁

[報告書]

- 大阪文化財センター編、1984、『山賀(その3)』、大阪文化財センター
 岡山県教育委員会(岡田博他)編、1985、『百間川沢田遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59
 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター(山本悦世)編、1992、『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊
 香川県埋蔵文化財調査センター(宮崎哲治)編、1993、『林・坊城遺跡』、香川県教育委員会
 柏屋町教育委員会(新宅信久)編、1998、『江辻遺跡第4地点』柏屋町文化財調査報告書第14集
 唐津市教育委員会(中島直幸他)編、1982、『菜畑』唐津市文化財調査報告書第5集
 高知県文化財団埋蔵文化財センター(出原恵三他)編、2000、『北高田遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第50集
 高知県文化財団埋蔵文化財センター(曾我貴行他)編、2001、『居徳遺跡群I』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第62集(1B・1C・1D区)
 高知県文化財団埋蔵文化財センター(藤方正治他)編、2002、『居徳遺跡群III』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第69集(1A・1C・1D N・1F区)
 高知県文化財団埋蔵文化財センター(佐竹寛他)編、2003a、『居徳遺跡群IV』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第78集(1E・2A・3B・4C区)

高知県文化財団埋蔵文化財センター（松葉礼子他）編、2003b、『居徳遺跡群V』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第86集(4A・4B区)

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（吉田昇他）編、1998、『佃遺跡』兵庫県文化財調査報告第176冊

高知県文化財団埋蔵文化財センター（曾我貴行）編、2004、『居徳遺跡群VI』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第91集(5A・3A・1C・4D区)

高知県文化財団埋蔵文化財センター（出原恵三他）編、2011、『上ノ村遺跡II』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第120集

徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会（勝浦康守）編、1997、『三谷遺跡』

福岡市教育委員会（池田祐2）編、1998、『福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告5：福岡市西区橋本一丁田遺跡 第2次調査・橋本遺跡第1次調査』福岡市教育委員会調査報告書第582集

松山市教育委員会（宮内慎一他）編、1999、『岩崎遺跡』松山市文化財調査報告書第71集、松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

六甲山麓遺跡調査会・伊丹市文化財調査団（浅岡俊夫他）編、2000、『口酒井遺跡：第1次～第10次・第12次～第16次調査の概要』

[挿図出典]

第IV②-1～4図：地区・番号のみの表示はすべて居徳遺跡出土資料（高知埋文 2001・2002・2003a・b・2004）。「上ノ村～」は高知埋文（2011）の遺物番号に対応。「北高田～」は高知埋文（2000）の遺物番号に対応。「権原～」は権原考古学研究所（2011）の遺物番号に対応。「江辻4地点～」は柏屋町教育委員会（1998）の遺物番号に対応。「口酒井15次～」は六甲山麓遺跡調査会他（2000）の遺物番号に対応。「橋本一丁田～」は福岡市教育委員会（1998）の遺物番号に対応。「津島岡大3次～」は岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（1992）の遺物番号に対応。「沢田～」は岡山県教育委員会（1985）の遺物番号に対応。「津島岡大3次～」は岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（1992）の遺物番号に対応。「三谷SX3」は徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会（1997）の第42図38。「山賀」は大阪文化財センター（1984）の第53図260・第18図916・918、「岩崎」は松山市教育委員会（1999）の第214図VI 148。第IV②-4図18は筆者実測。

第IV②-5・6図：筆者作成。

*「高知埋文」は高知県文化財団埋蔵文化財センターの略